

万葉集1425番歌の「恋」の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the “Love” in the 1425th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集1425番歌「あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも」は山部赤人が満開の桜の花を見ながら詠んだ歌である。通説では「山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく心惹かれることはないだろうに」と解している。問題は結句の「恋」の解釈である。上代語の「恋」は一般に「眼前にない人や物を求め慕う気持ち」を表すが、通説ではこの「恋」を例外的に「対象を目にしながらなお飽き足りなく思う気持ち」と解している。本論文では、この「恋」は例外的なものではなく、上代の一般的な「恋」であることを論証する。また、万葉集408番歌と745番歌の「恋」の解釈についても、通説の解釈には問題があることを指摘する。

1. はじめに

万葉集1425番歌は巻八の「春の雑歌」に収録されている山部赤人の歌のひとつである。本論文の目的は、この歌の「恋」に関する従来の解釈を再検討することである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう [1]。

08/1425 あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

【原文】足比奇乃 山桜花 日並而 如是開有者 甚恋目夜裳

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。また、注目箇所には下線を引いた。

① 新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

【現代語訳】(あしひきの)山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく心惹かれることはないだろうに。

【注釈】結句「甚恋目夜裳」は、「波太古非米夜母」(四〇五一)にならって「はだこひめやも」と訓む説(『完訳日本の古典万葉集』)に従う。ここの「恋ふ」は、対象を目にしながらなお飽き足りなく思う意。「なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ」(四〇八)。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

【現代語訳】(あしひきの)山の桜花が 幾日も こんなに咲いていたら ひどく恋しくは思わないだろう

【注釈】日並べて——幾日も続けて。原文に「日並而」とあり、「比奈良倍弓」(四四四二)の仮名書に合わせてヒナラベテと読む。しかし「気並弓」(二六三)という例もあり、ケナラベテと読むことも可能。○はだ恋ひめやも——ハダははなはだ。反語で、花期が短いからこそこんなに恋慕うのだ、といったもの。ハダの原文「甚」をイト・イタ・イタクなどと読む説もあるが、「波太古非米夜母」(四〇五一)に合わせてハダと読む。文武・元明朝の良吏の船連秦勝(ふなのむらじはだかつ)という者の名を「甚勝」とも記している。なお「秦」は当時ハダといった(→二三九九)。

③ 講談社文庫(中西進)^[3]

【訓読文】あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば いと恋ひめやも

【現代語訳】あしひきの山の桜が何日も、このように咲くのなら、どうしてひどく待ちこがれよう。

【注釈】○あしひきの——→一〇七。○日並べて——→二六三。ヒ並ベテの表現が後に登場する。→四四四二。○やも——強い否定をとまう疑問。上に事実と反対の内容を仮定して、この疑問で結ぶ型は二一などの共通。日並べて咲かないので恋う意。

④ 萬葉集註釈(澤瀉久孝)^[4]

【訓読文】あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば いたく恋ひめやも

【現代語訳】山の桜の花が毎日毎日このやうに咲いたならば、こんなにひどく恋しく思ふ事があろうか。

【注釈】あしひきの——山の枕詞(二・一〇七)。

山桜花——全注釈に「山にある桜の樹の花で、ヤマザクラといふ種類では無い」とある。

日並べて——類、紀にヒヨナヘテ、西以後ヒナラヘテとして殆ど異論を見ない。「比奈良倍弓」(廿・四四四二)の仮名書例があるから、旧訓が正しいやうにも見えるが、前に「気並而」(三・二六三)の例があり、赤人自身「気長在者」(六・九四〇)とも「客乃気長弥」(六・九四二)とも云つてゐるところを見ると、今もケナラベテと古風な云ひ方をしたと見る方が正しくはないであらうか。「朝尔日尔」(四・六六八)の「日」をケと訓むやうに。

いたく恋ひめやも——「甚」を旧訓イトとし、略解にイタモとしたが、その後も旧訓が用ゐられてきた。しかし「いと」は形容詞に冠せられる例であること前(四・五三七)に述べた如く、阪倉篤義君が「反語について」(萬葉、第廿二号、昭和卅二年一月)で、「いたく」は仮名書例、「わが盛り伊多久くだちぬ」(五・八四七)、「わが妻は伊多久恋ひらし」(廿・四三二二)、「おきつ風伊多久な吹きそ」(十五・三五九二)など七例いづれも動詞を修飾する事を述べ、この歌の「甚」は「動詞『恋ふ』を修飾する点よりして『イタ

クコヒメヤモ』と訓み改めることが、即ちこの歌を正しく『解釈する』ゆゑんなのではあるまいか」と云はれたのが正しい。さう訓めば八音となるが、メヤ即ち ej の音があつて字余例第三則（一・六）に相当するので、結句として七音よりも八音の方が通例（二・九二）なのでその点でも認められるのである。

【考】古今六帖（六「山ざくら」）、第三句「ひならべて」結句「いと恋ひめやは」、新千載集（一）第三句以下「日を経つつかくしにほはばわれ恋ひめやも」とある。

⑤ 日本古典文学大系^[5]

【訓読文】あしひきの 山桜花 日並べて 斯く咲きたらば いと恋ひめやも

【現代語訳】山の桜の花が幾日もつづいてこのように咲いているのなら、私がひどく桜の花を恋しく思うことがあるか。

【注釈】○あしひきの——枕詞。○日並べて——連日。○いと——ひどく。

上に示した五つの先行研究を見ると、まず訓読に関する差異がいくつか見られる。第三句の原文「日並而」の「日」について、①と②と⑤は「ひ」、③と④は「け」と訓んでいる。また、結句の原文「甚恋目夜裳」の「甚」について、①と②は「はだ」、③と⑤は「いと」、④は「いたく」と訓んでいる。一方、解釈については、いずれも「山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく心惹かれることはないだろうに」という内容でほぼ一致している。

次の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

この節では特に1425番歌の結句「はだ恋ひめやも」の「恋」の解釈に焦点をあてる。前節の①から⑤の解釈はいずれも内容的にほとんど同じだと思われるので、以下では①の新日本古典文学大系の解釈に基づいて議論する。以下にその解釈を再掲する。

08/1425 あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

（現代語訳）（あしひきの）山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく心惹かれることはないだろうに

（脚注の一部）この「恋ふ」は、対象を目にしながらなお飽き足りなく思う意。

この解釈には少なくとも二つの問題点がある。まず第一の問題点を見るために、上の現代語訳を次のように意識してみよう（以下では枕詞はすべて省略する）。

【意識1】山の桜の花は短期間だけ咲くからこんなにひどく心惹かれるのであって、もし何日も今のように咲いたら、それほど心惹かれることはないだろう。

この内容は前節の②の注釈に「花期が短いからこそこんなに恋い慕うのだ」とあることと一致している。しかしこのような解釈は、素直な万葉人の感性に合わないのではなからうか。というのは、彼らは次のような歌を詠んでいるからである（似た内容の歌はほかにも多数ある）。

10/1970 見渡せば 向かひの野辺の なでしこが 散らまく惜しも 雨な降りそね

10/2118 朝霧の たなびく小野の 萩の花 今か散るらむ いまだ飽かなくに

もし彼らの感性が「花期が短いからこそこんなに恋い慕うのだ＝花は短期間だけ咲いて欲しい」というものであるならば、上のように花が散るのを惜しむ歌が数多く詠まれるはずはないのではなからうか。これが第一の問題点である。

次に第二の問題点は、先に示した新日本古典文学大系の「恋」の解釈に関する問題である。現代語訳の中では「恋ふ」が「心惹かれる」と訳されているが、脚注には「対象を目にしながらなお飽き足りなく思う意」とある。しかし、これは矛盾している。というのは、「心惹かれる」はポジティブな感情であるのに対して、「飽き足りなく思う」はネガティブな感情で、両者は大ざっぱに言って逆の意味をもつからである。ちなみに、ここで言うポジティブかネガティブかの判断基準は「作者が現状に対して満足しているかどうか」という点に着目している。実際、次のようにすれば矛盾の実体が明らかとなる。「飽き足りなく思う」は「不満に思う」の婉曲表現だから、いま試しに、現代語訳の「心惹かれる」を「不満に思う」で置き換えてみよう。意識といっしょに以下に示す。

山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく不満に思うことはないだろうに

【意識2】山の桜の花は短期間だけ咲くからこんなにひどく不満に思うのであって、もし何日も今のように咲いたら、それほど不満に思うことはないだろう。

この【意識2】は先に示した【意識1】とは明らかに「逆」の内容になっている。というのは、花が短期間だけ咲くという状況に対して、【意識1】は「ひどく心惹かれる＝大満足」であるのに対して、【意識2】は「ひどく不満」だからである。すなわち、新日本古典文学大系の現代語訳と脚注の「恋ふ」の解釈はほとんど「逆」になっているのである。これが第二の問題点である。

ちなみに、【意識1】と【意識2】を比較すると、【意識2】の方が万葉人の感性に（どちらかと言うと）近いことがわかる。なぜならば、「不満に思う」という感情は、先の例（1970番歌と2118番歌）に見られるように、花が散るのを万葉人が「惜しむ」感情と、いずれもネガティブという点では一致しているからである。上代語の「恋」は、ほとんどの場合、相手に逢いたいのになかなか逢えない時に感じる「辛く苦しい」思いであり、現状に満足していないという意味において、「恋」はネガティブな感情である。したがって、満開の桜を賞美している最中に「恋」を抱くことはありえない。賞美している最中に抱く感情は、【意識1】のような「心惹かれる」や「飽きない」（「飽き足りない」ではない）のようなポジティブな感情である。実は、1425番歌の結句「はだ恋ひめやも」の「恋」は、作者が満開の桜を賞美している最中に抱いたものではないことが次節において示される。新日本古典文学大系の矛盾の根本原因はこの点にある。

3. 万葉集1425番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈を示し、その後に具体的な根拠を示していくことにしよう。まず1425番歌の訓読、直訳、意識を示す。

【訓読】 あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

【直訳】 もし山の桜の花が（十分満足するほど）何日間も、このように（満開のまま）咲いてくれたならば、（今までのように）ひどく「恋しい」思いをするだろうか... おそらく、それほど「恋しい」思いはしないで済むだろう。

【意識】 もし山の桜の花が（十分満足するほど）何日間も、このように（満開のまま）咲いてくれたならば、桜の花に対する「恋しい」思い——すなわち、桜の花が咲く時期を前にして「早く花が見たい」と待ち続ける時の「恋しい」思いや、花が散った後で「もっともっと賞美したかったのに」とありし日の満開の桜の花を偲びながら抱く「恋しい」思いなど——は、今までほどひどいものにはならないまいだろう（なぜならば、何とか頑張って花が咲くのを待ち、いったん花が咲きさえすれば、それまでに積み積もった「恋しい」思いが尽きるまで十分長い期間咲き続けてくれるのだから）... ところが、現実には、自然界の摂理として桜の花は二日か三日ほどですぐに散ってしまうから、今までと同様ひどく「恋しい」思いをしなければならぬだろう、それが残念だ。

上に示した新しい解釈には三つのポイントがある。第一は、この歌が反実仮想であるという点である。第二は、上の直訳や意識の「恋しい」が上代語のネガティブな「恋」（辛く苦しい）の意であるという点である。したがって、満開の桜の花を見ている最中にこのような「恋」の感情を抱くはずはないから、第三ポイントとして、この歌の結句「はだ恋ひめやも」の「恋」を抱く時期は、通説のように満開の桜の花を見ている最中ではなく、桜の花が咲くのを「恋しく」待っている時期や、あるいは花が散った後に「もっと賞美したかったのに」と「恋しく」思う時期である。

上代の「恋」の語義に関して「時代別国語大辞典」は次のように説明している（下線は著者による）（〔6〕、p. 305）。

万葉集に恋を表わすのに「孤悲」という字をあてたものが三〇例ほどあり、この表記は恋^{コト}というものがどう考えられていたかを端的に示している。それは相手が目の前にいないのを淋しく思い、求めたう心である。人についていうことのほかに花や鳥、自然の景物についていうことも多い。

人間であれ、花であれ、早く相手に逢いたいのに相手が目の前にいないから「辛く苦しい」と感じるのである。この点で、上代の「恋」はネガティブな感情だと言える。万葉集の「恋」はほとんどすべてこの意味で用いられている。例えば、

04/0678 直に逢ひて 見てばのみこそ たまきはる 命に向ふ 我が恋やまめ
17/3980 ぬばたまの 夢にはもとな 相見れど 直にあらねば 恋止まずけり

これらの歌では「直接に逢い見る」ことができ初めて「恋」の思いは止むだろうと述べている。この「恋」は「時代別国語大辞典」の説明と完全にコンシステントになっている。

これに対して、前節に示した新日本古典文学大系は1425番歌の「はだ恋ひめやも」の「恋」を「対象を目にしながらな お飽き足りなく思う気持ち」と例外的に解している。そして、似たような例外的な歌の例として、大伴家持が坂上大嬢に贈った次の二首をあげている（〔7〕、pp. 261-262、p. 417）。

03/0408 なでしこが その花にもが 朝な朝な 手に取り持ちて 恋ひぬ日なけむ

(現代語訳) あなたがなでしこであってくれないものか。そうすれば毎朝手に取りもって愛でない日はないだろうに。

04/0745 朝夕に 見む時さへや 我妹子が 見とも見ぬごと なほ恋しけむ

(現代語訳) 朝夕相見の時が来ても、相見ている相見ないでいた時のように、やはりあなたが恋しいだろう。

これらの歌では、確かに、相手を見ながら、なお「恋」の気持ちを抱いている。常識的な感覚からすれば、相手が目の前にいるのだから「嬉しい」はずであり、ネガティブな「恋」の感情など抱くはずはないと思うかも知れない。おそらくこの理由から、新日本古典文学大系は408番歌の「恋」を「愛でる」とポジティブな意味に現代語訳しているのだろう。そして、745番歌の「恋」についても現代語訳では「恋しい」となっているが、この「恋」は上代語のそれではなく、おそらく現代語の「愛しい」に相当するポジティブな意味であろう。もし上の408番歌と745番歌の「恋」が本当にこのようなポジティブな感情だとすれば、明らかに上代の「恋」の語義に反しており、例外と見なさなければならない。果たして、この二つの歌の「恋」は例外的なものであろうか。

結論から言えば、これらの歌の「恋」を例外と見なす必要はない。まず745番歌について考えよう。この歌は、作者の気持ちを補って訳すと、次のようになると思う(新日本古典文学大系とは違う)。

(本来なら「恋」は見ない時に感じるはずなのに、私の場合には、)朝夕に見る時でさえ、見ているもあたかも見ないが如く、我妹子がなお「恋しい」ことだ

第二句の「さへ」、第四句の「見ぬごと」、第五句の「なほ」という表現は、図らずも、本来なら「恋」という語が「見ない」時に用いられるものであることを証言している。なぜならば、もし相手を見ている最中に「恋」の感情を抱くのが当たり前ならば、このような「さへ」、「見ぬごと」、「なほ」という語がわざわざ用いられるはずはないからである。この歌は、作者の大家家持が、本来なら妹を見ていない時に感じるはずの「恋」を、今こうして見ている時にも感じてどうしようもないと現在の「なお満ち足りない」心境を述べたものであり、だからこそ、歌にあるような表現が用いられているのである。この歌の「恋」は、作者が「現状に満足していない」という意味でネガティブな感情であり、上代の一般的な「恋」と同じであり、例外ではないのである。

だとすれば、この歌の「恋」を通説のようにポジティブな意味に解すると、歌の文脈は不自然なものになるはずである。実際、上の新日本古典文学大系の現代語訳は持って回った表現になっている。もしこの歌の「恋」を現代語の「愛しい」というポジティブな意味に解すると、この歌の骨子は「朝夕見る時でさえ、見ているも見ないが如く、なお妹が愛しい」となるが、一見して不自然である。一般に、見ている時の方が見ていない時よりも「愛しさ」は増すはずだから、「見ているも見ないが如く」という表現があるのはきわめて不自然であり、また「朝夕見る時でさえ」は「朝夕見るたびに」に、「なお」は「ますます」に表現を変えないと不自然である。すなわち、もとの歌の表現のまま自然な文脈となるためには、この歌の「恋」はネガティブな「満ち足りない気持ち」として解する必要がある、その時に初めて「さへ」、「見ぬごと」、「なほ」という表現は生きてくるのである。

それではなぜ、相手を目の前にして、なお「恋しい=満ち足りない」という思いを抱くのだろうか。それは、花などの賞美の場合と違って、男女の恋愛の場合は最終目的が「お互いに肌を触れ合わせて寝る」ことであり、単にそばにいて眺めるだけでは「恋」の気持ちがおさまらないからであろう。このことを証

言しているのが次の歌である。

14/3358 さ寝らくは 玉の緒ばかり 恋ふらくは 富士の高嶺の 鳴沢のごと

この歌は、発句の「寝る」と第三句の「恋ふ」を対比させることにより「妹と寝ている時以外は恋しいよ」と言っており、さらに妹と寝る時間が、離れている時間に比べていかに短いかを嘆いている。

さて、745番歌の考察に話を戻すと、この歌では「恋」を感じる時として、「朝夕に見む時さへ」となっていて、「夜」が含まれていないのは注目に値する。夜はいっしょに寝るから、さすがにこの時には「恋」を感じないはずであり、もし仮に、夜いっしょに寝ている時に「恋しい」という人がいれば、それこそ本当の意味で上代の「恋」に例外があることになる。ところが、そのような例はない。昼間は仕事のためお互いに離れて過ぎざるを得ないから、大伴家持が坂上大嬢といっしょにいる時間は、夜と朝と夕であるが、夜はいっしょに寝るから「恋」を感じることはなく、朝と夕は「見る」ことしかできないから、「見る」だけではもの足りずやはり「恋」を感じるのであろう。このように考えると、745番歌の「恋」は上代の一般的な「恋」であり、通説が言うような例外的な「恋」ではないことがわかる。

次に、もう一つの408番歌について考えよう。新日本古典文学大系はこの歌の「恋」を「愛でる」とポジティブに解しているが、実は、これも先の745番歌と同じように、上代の一般的な「恋」として解することができる。大伴家持にとって、もし坂上大嬢がナデシコの花であってくれたならば、いつもそばに置いて「見る」ことができ、状況は今までより改善されるけれども、見るのはしよせん「花」であり、恋愛の最終目的である肝心の「寝る」ことはできず、(彼女の分身の花を見ながらも)やはり生身の女である坂上大嬢を偲んで「恋しい」気持ちを抱くのである。このように考えれば、408番歌の「恋」もまた上代の一般的な「恋」の語義の範囲内で理解することができる。

以上の考察から、以下の一般的な結論が導かれる。上代の「恋」の語義は、「時代別国語大辞典」が言うように、ほとんどすべての場合、「相手が目の前にいないのを淋しく思い、求めたう心」と解してよい。ただし、人間の恋愛の場合に限っては、「たとえ相手が目の前にいる時でも、単に眺めるだけで寝ることができない」場合には、実質的に「目の前にいない」と見なすべきである。745番歌の第四句「見とも見ぬごと」という表現はまさにこのことを言っている。ちなみに、人間の恋愛の場合、「見る」は暗黙に「寝る」を含むことが多いから、上のように「見る」が単に「眺めるだけ」を意味するケースはそう多くないであろう。

さて、このように上代の「恋」の語義が確定すると、「恋」の対象が「花」の場合、最終目的は満開の花を心ゆくまで賞美(挿頭にもすることも含む)することであるから、満開の花を賞美している最中に「恋しい」と思うことはありえない。よって、新日本古典文学大系(および従来の注釈書)のように、1425番歌の「はだ恋ひめやも」の「恋」を、満開の桜の花を見ながら感じる現代語のポジティブな「恋」の意に解するのは適切とは言えない。

では、「はだ恋ひめやも」の「恋」はどのように解すべきだろうか。この「歌」自体は満開の桜の花を見ながら詠まれたものであるが、歌の内容は反実仮想であり、「はだ恋ひめやも」の「恋」は必ずしも作者の現在の気持ちを表すとは限らない。実際、現在の作者は満開の桜の花を見て満足しているのだから、「恋」を抱くはずはない。では、現在でないとなれば、「はだ恋ひめやも」の「恋」を抱く時期はいつたいつた何時だろうか。その答えは、一般に多くの人々が桜の花に対して「恋」を抱く時期である。一つは、桜の花が咲く時期を前にして「早く花が見たい」と「恋しい」思いで待つ時期である。もう一つは、まだ十分に賞美し尽くさないうちに桜の花が散ってしまい、「もっともっと賞美したかったのに」とありし日の

満開の桜の花を偲びながら「恋しい」思いを抱く時である。おそらく、この二つの時期が、多くの人々が桜の花を「恋しい」と思う主な時期であろう。この節の初めに示した新しい解釈の意識には、以上のことが考慮されている。

なお、このような解釈が適切であることは、次の歌の存在によっても確かめられる。

18/4051 多祜の崎 木の暗茂に ほととぎす 来鳴きとよめば はだ恋ひめやも

この歌は大伴家持が天平20年(748)の太陰暦3月25日、ホトトギスが鳴き始める時期を「前」にして詠んだ歌である。ホトトギスがまだ鳴き始めていることは、この歌の前後の歌(4050番歌や4052番歌など)から明らかである。この歌は反実仮想で、もしホトトギスが来て鳴けば「はだ恋ふ」ことはないだろう、という内容である。逆に言えば、ホトトギスが鳴いてない今の気持ちは、早く来て鳴いて欲しいと「はだ恋ふ」状態にあることを示している。したがって、桜の花の場合も同じで、花が咲く時期を目前にして、まだ花が咲いていない時に抱く気持ちが「はだ恋ふ」であり、いったん花が咲いたら「はだ恋ふ」ではなくなるのである。

最後に、「はだ恋ひめやも」は反語であり、「はだ恋ふ=ひどく恋する」を反語で否定するのであるから、「ひどく恋することはない」や「まったく恋することはない」と全否定の意に解するのではなく、「それほどひどく恋することはない」と部分否定の意に解すべきであろう。これは英語で「all」の否定が全否定ではなく部分否定になるのと同じである。このことは、もし桜の開花期間が今より十分長くなったとしても、花に対する「恋」の思いが完全になくなるわけではないこと意味している。

4. おわりに

本論文では、万葉集1425番歌の「恋」の解釈について再検討を行い、通説のように「桜の花は短期間だけ咲くから強く心惹かれるのであって、もし何日も咲いたらそれほど心惹かれないだろうに」と解するのではなく、「もし桜の花が十分満喫できるほど長く満開のまま咲いてくれたならば、(今までとは違って)恋しい思いはそれほどひどくはならないだろうに」と解すべきであることを提案した。また、万葉集408番歌と745番歌の「恋」の解釈についても、通説の解釈には問題があることを指摘した。以上のような提案や指摘が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1]「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.248、2000年。
- [2]「万葉集②」、新編日本古典文学全集、小学館、p.295、1995年。
- [3]「万葉集 原文付全訳注(二)」、中西進、講談社文庫、pp.168-169、1980年。
- [4]「万葉集注釋 卷第八」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.33-347、1961年。
- [5]「万葉集 二」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.284-285、1959年。
- [6]「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。
- [7]「万葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、1999年。